愛媛大学教育学部紀要　教育科学　第49巻　第2号　37～39　2003

患者の心理に関する研究（1）
―― 特発網膜剥離体験者として ――

佐　藤　公　代
（教育心理学教室）

（平成14年10月17日受理）

Study on Patient's Psychology (1)

Kimiyo SATOU

（問題と目的）

2000年3月10日－23日まで，特発網膜剥離（裂孔原性網膜剥離）で日赤に入院した。生まれて初めての病気入院である。3月9日，修論の中間発表会が午後からある日の午前11時頃，突然右目が見えなくなり，何だろうと思いながら病院にも行かず，当日は発表会をこなし，翌日，近くの眼科に行った。検査の結果，網膜剥離と診断され，日赤に行くはめになった。医学がまだ進歩していない時代だったら間違いなく失明していたであろうが，医学の進歩のおかげで2週間くらいの入院で完治してしまうとは驚きであった。そのときの患者としての心理状態を内観法でまとめてみようと思ったのが，今回の研究動機である。看護学校の非常勤もやらされ（最初はやれない人のピンチヒッターだったのが，今は楽しんでやっている。），「医療と心理学」を考えるきっかけとなり，「健康心理学」の体系化を図る必要性も感じている。

筆者の手元にある本を羅列する。「医療と看護のための心理学」「新・看護心理学」「看護のための心理学」「患者を知るための心理学」「系統看護学講座　心理学」「健康心理学」。どれも教科書むきに書いてあるのでいろいろなことが網羅されている。本論では，患者の心理に焦点をあててまとめようと思い，上記の本を参考に筆者からの問題提起を試みる。

辰野（2000）は，安斎・奥瀬（1981）の「入院患者にに特有の心理」として，「孤独感・疎外感」「外界への関心の低下」「ささいなことへの関心」「周囲に対する不満や怒り」「身体に対する不安」「同調・被暗示性」「支援の欲求」を取り上げている。また，辰野（2000）は，金子（1966）の「患者にみられる心理的反応」として，（1）一般的心理反応，（2）神経症的反応，（3）心身症的反応，（4）精神病的反応，を取り上げている。（1）一般的心理反応には，「心気傾向」「自己中心性」「退行」「被暗示性」「疑惑心」「攻撃性」「劣等感」（2）神経症的反応には，「不安反応」「心気反応」「強迫反応」「恐怖反応」「神経衰弱反応」「ヒステリー反

応」「抑うつ反応」（3）心身症的反応には，「器官神経症」「高血圧・下痢・チック・頻尿」（4）精神病的反応には，「原始反応」「妄想反応」「精神病的うつ病」が，あると言われている。

稲岡（1999）は，「心理社会的医療環境と患者の心理」として，「基本的欲求の阻害」「治療，処置，検査時の体験」「疾病への恐れ」「対象愛喪失への恐れ」「自己コントロール能力喪失への恐れ」「環境変化」を，「患者の情動」として「不安・恐れ」「怒り」「抑うつ」「無力感，絶望感」を，「防衛機制」として，「抑圧」「否認」「置換え」「退行」「知性化」を取り上げている。

小笠原（1998）は，「患者心理のメカニズム」として「病気体験と不安」「患者の年代別特徴」を取り上げている。その中で，ビベイスとウオルッシュは，「子どもの病気理解の発達」を3段階に分け，7歳以下の1段階は「理解できない，現象主義，感染」，7－11歳の2段階は「汚染，内在化」，11歳以上の3段階は「生理学的理解，心理生理的理解」とみなしている，ことからして成人，老人も「身体器官の機能を理解し，病気は器官の機能不全として理解」し，「心理的原因も病気の原因になりうることを理解」するのであろう。

松本（2000）は，「児童，老人，終末期患者の心理」において，「児童期の患者の心理」として，「分離による不安」「入院治療での配慮」「児童期の患者における母子関係」を，「老人の心理」として，「性格特徴」「性格を変化させる要因」を，「終末期患者の心理」として，「定義と心理特性」「医療者側の配慮」「死の希求者の問題」を，取り上げている。青年期，中高年期の患者の心理について深める必要性を感じている。

川村（2002）は，「プラス思考だけじゃダメなんだ－“報酬系”と“罰系”が生き方のカギを握る」の中で，ストレッサーの強度を「ホームズ・レイ社会適応尺度表」で調べている。また，認識と解決の関係を次のように考えている。認識＋解決＝すぐ実行，認識＋解決できない＝他人にサポートを求める，認識できない＋解決＝気づくことが先決，認識できない＋解決できない＝あきらめる（受け入れる）。川村の考えを患者の心理に応用できるのではないかと考えた。

（方　　法）

1）対象者：筆者本人
2）手続き：内観報告（客観性に欠けるという批判もあるだろうが，自己を客観的に見つめ直すという分析も必要である。）

（結果と考察）

「入院患者に特有の心理」としての「孤独感・疎外感」「外界への関心の低下」「ささいなことへの関心」「周囲に対する不満や怒り」「身体に対する不安」「同調・被暗示性」「支援の欲求」はあらわれなかった。これは，2週間という短い期間で，6人部屋，筆者の性格，比較的軽かったことの要因から，むしろ，逆の結果となった。6人部屋でみな良い人ばかりであったので「孤独感・疎外感」は感じられなかった。新聞，雑誌などはみれないが，その代わり，ラジオでニュースなどを聞いて外の世界を知ろうとした。幸い，夫が毎日見舞いに来て職場のこ

とやニュースなど報告してくれた。その結果，「外界の関心の低下」はない。「健康なときには気にしなかったような食事や衣服，相手のことばづかい・態度などの，細かいことを気にするようになる。」ことはなく，入院していないときと同じであった。「周囲に対する不満や怒り」「身体に対する不安」「同調・被暗示性」もなかった。「支援の欲求」どころか，逆に，おばあさんのつきそいの手伝いをしたりして感謝された。これは，自分に余裕があるので他人のことにも目が向き，筆者のお人好しの性格があらわれたのであろう。

「一般的心理反応」としての「心気傾向」「自己中心性」「退行」「被暗示性」「疑惑心」「攻撃性」「劣等感」，「神経症的反応」「心身症的反応」「精神病的反応」もみられなかった。これも病気が軽かったこと，入院期間が短かかったこと，筆者の性格，の3要因から，常識的に言われてきたことがあてはまらなかったのであろう。

（結　　論）

「認識できる＋解決できる＝すぐ実行」のタイプとわかり，退院後，早速，目に関する本を買いあさり，予防医学をめざして心身の研究を生涯の友と定めた。

（今後の課題）

要因分析をして実験的，調査的，面接的手法で「患者の心理」をより深く探る。

参考文献

安斎哲郎・奥瀬哲　1981　臨床場面における心理学　医学書院　36－38
稲岡文昭　1999　患者の心理　内山喜久雄・上里一郎　編　新　看護心理学　ナカニシヤ出版　141－156
ジョージ・C・ストーン　編著　本明寛・内山喜久雄　監訳　1990　健康心理学　実務教育出版
金子仁郎　1966　患者の心理　金原出版　10－21
川村則行　2002　プラス思考だけじゃダメなんだー「報酬系」と「罰系」が生き方のカギを握るー　サンマーク出版
松本和雄　2000　患者の心理　児童，老人，終末期患者の心理　篠置昭男・中西信男　他編著　看護のための心理学　福村出版　149－159
小笠原明彦　1998　患者心理のメカニズム　藤田主一，園田雄次郎　編　医療と看護のための心理学　福村出版　129－142
辰野千寿　2000　系統看護学講座　心理学　医学書院　235－238，240－241